

一 橋 大 学 哲 学 会 報

一橋大学哲学・社会思想学会会報 No. 19
(「研究会便り」より通算第47号)

発行者 一橋大学哲学・社会思想学会

発行所 一橋大学哲学・社会思想学会事務局

tel./fax 042-580-8644

〒186-8601 国立市 中2-1 一橋大学社会思想共同研究室内

Email: phil6h.kaorun@r.hit-u.ac.jp

ホームページURL: http://www.soc.hit-u.ac.jp/~soc_thought/index.htm

【目次】

前回個人研究発表	まとめ (小倉翔氏)	1 頁
前回個人研究発表	まとめ (清水雄也氏)	3 頁
前回個人研究発表	まとめ (小谷英生氏)	4 頁
前回シンポジウム	まとめ (上野大樹氏)	5 頁
各ゼミの卒論・修論・博論・新 M1/D1 の研究テーマ		
井頭ゼミ	7 頁
大河内ゼミ	8 頁
加藤ゼミ	9 頁
平子ゼミ	9 頁
森村ゼミ	10 頁

2014年12月6日に第16回大会が第3研究館にて開催されました。以下は、その時の個人研究発表の発表者のまとめとシンポジウムのまとめです。

前回個人研究発表まとめ

認識的外在主義と推論

——《推論がアприオリに正当化されること》という観点から

小倉 翔 (本学社会学研究科博士後期課程)

本発表は、「一般性論証」への可能な反論を一つ取り上げその反論が的確であるかどうかを検討するものであった。「一般性論証」とは、「アприオリな正当化は《経験から経験を越え出るような結論へ推論をすること》にとって不可欠である」という論証である。この「一般性論証」は Laurence Bonjour によって「アприオリなものが存在する」ということを示す論証として提出された。すなわち、Bonjour に

よって提出された「一般性論証」は「アприオリな正当化は認識論的に不可欠である」と主張するのである。

本発表において取り上げられたのは「一般性論証は特に認識的内在主義を仮定するときにしかうまくいかない」という趣旨の反論である。これはアприオリな正当化についての二つの区別に関係して提起されるタイプの反論である。一般性論証は《肯定的な意味でのアприオリな正当化》を《推論をすること》にとって不可欠であると結論するものとして理解されるが、しかし《否定的な意味でのアприオリな正当化》が理論的には可能であって、それは「推論をすることについての外在主義」である。そして「こうした種類のアприオリな正当化の可能性が残されるから、一般性論証は切り崩される」と言われるのである。

このタイプの反論が的確であるかどうかを検討するに際して、本発表では次のような種類の外在主義が想定された。すなわち、《推論をすること》のうちのいくつかは——問題の個人が気づけるような理性的洞察／理解を必要とすることなしに——たんに「その推論が事実上信頼可能ないし妥当である」という事実のおかげで正当化される、という見方（(Externalism 1)）である。

これに対し、本発表では次のような結論を示した。すなわち、「指摘された外在主義的理論は、論理的に可能な理論ではあるけれども、《どのようにして推論をすることが（否定的な意味で、つまり、経験に依存しないという意味で）アприオリに正当化され得るのか》についてのもっともらしい説明ではない」ということである。これをもって本発表は「しかし肯定的なもの——理性的洞察／理解にのみ依存するアприオリな正当化——は他の唯一のオルタナティブな説明としてもっともらしいように見える。それゆえ一般性論証は《肯定的な意味でのアприオリな正当化》の存在を信じることを支持する」ように見えるということを主張した。

質疑応答に際しては異分野の方からも含め、大変有益なご意見・ご質問をいただいた。

そのうち、より専門的と思われるご意見・ご質問としては二つあった。一つは、現実の外在主義者は(Externalism 1)をとらないのではないかとのご指摘である。これに対しては、確かに現実の外在主義者は(Externalism 1)をとらないだろうが、しかし今回の発表にプラスして、今回の発表では検討対象外とされたようなタイプの外在主義（(Externalism 2)）への反論が将来的に実行されたならば——(Externalism 2)をとる外在主義者としては Harman や Wright などが現実に存在するので——実際に存在する外在主義者への反論になり得るだろうと回答した。

もう一つは、いわゆる「一般性問題」に係わるものであった。すなわち、外在主義者は本発表で(Externalism 1)がうまく回避することができないとされたような《とんでもなく証明するのが複雑な推論をすることが正当化されること》を、信頼できる認知的プロセスを特定することによって避けられるのではないかとのご指摘をいただいた。これに対しては、「一般性問題」をどのようにして外在主義者は解決し得るのかと応答した。

因果理論は介入を放棄すべきか—介入主義の意味論的問題

清水 雄也（本学社会学研究科博士後期課程）

本発表は、介入主義的因果理論に対して近年なされた或る批判を取り上げ、その議論の帰結と妥当性を検討するというものであった。以下、発表の概要と質疑応答についてまとめる。

因果性とはいかなるものか。この古くからの問題が、今日、科学哲学の文脈において再び盛んに論じられている。そして、その中で標準説とされているものの1つに、James Woodward が提唱する介入主義的因果理論がある。介入主義は、因果性を介入という道具立てによって意味論的に解明しようとする立場であり、その基本的な着想は次のようなものである。すなわち、「 Y を変化させるような X への可能な介入が存在するとき、かつそのときに限り、 X は Y の原因である」。

この介入主義に対して、Alexander Reutlinger は或る重大な修正を迫っている。それは、介入主義の核心たる介入を放棄せよというものである。上述のように、介入主義は可能な介入というアイデアに訴えているが、その可能性がどのような種類のものであるかということが問題となる。Woodward の理論は、介入を人間による実行可能性から切り離し、要求を原理的な可能性にまで弱めることを重要な特徴としている。さらに、Woodward は、この原理的な可能性なるものが物理的可能性ではなく、それよりもさらに弱いものであることをすでに認めている。このことから、Reutlinger は介入主義が要求する可能性とは論理的可能性に他ならないと見定め、それを介入の様相的特徴と呼ぶ。そして、この様相的特徴のために、介入は因果理論から除去されるべきものになっていると論じる。

Reutlinger は2つの議論を提示する。第1の議論は、Woodward の理論において介入は実質的な役割を果たしておらず、介入を含めるのは余計だというものである。第2の議論は、介入を不可欠なものだと考えると、そこから帰結する因果理論は不適切な理論にならざるを得ないというものである。

この議論には問題点がある。まず、Woodward が理論的に要請する介入の可能性が本当に論理的可能性なのか明瞭ではないし、仮に Woodward が様相的特徴を認めたとしても、介入主義を別種の可能性によって再構成できる見込みは依然として残る。また、介入が因果理論を不適切なものにするという議論は、反事実的条件法の標準的意味論において物理法則が担う役割を過剰に評価するものであり、これは意味論を適切に調整することで回避できるように思われる。このように、Reutlinger による批判は介入を放棄すべき一見の理由を与えるのみにとどまっており、介入を放棄するべきだという決定的な議論にはなっていない。本発表で指摘した点を含め、今後さらに徹底した検討がなされるべきである。

最後に、会場から頂戴した質問のうち2つのものについて報告したい。1つめは、「介入主義は無限後退を招くのではないか」というもので、これに対しては、介入主義の意味論的議論において悪性の循環や無限後退は発生していないと答えた。2つめは、「介入主義は形而上学的にはどのような種類の因果性を扱うのか」というもので、これについては、介入主義は因果の形而上学的分類について特定のコミットメントを伴わないと答えた。この他、多くの有意義な質問やコメントが寄せられ、今後の課題や議論のポイントがより明確化された。

前回個人研究発表まとめ

ドイツ通俗哲学の興亡
—18世紀ドイツ哲学理解のために—

小谷 英生 (群馬大学教育学部講師)

告知されていたタイトルからサブタイトルを変更させていただいたが、上記の題目で発表をさせていただいた。それは発表当日を迎えるにあたり、ドイツ通俗哲学の「興隆」と「衰亡」についてはかなりの字数を費やさなければ叙述できないことを痛感したからであるが、自分の読みの浅さを反省するところである。1760・70年代の「興隆」と、80・90年代の「衰亡」については後日別のかたちで公開する予定である。

さて、本発表ではドイツ通俗哲学一般の説明と、その「誕生」をエルネスティの論文「通俗的な哲学についての序説」の分析によって確認した。ドイツ通俗哲学はこれまでまったくといってよいほど注目されてこなかったが、80年代のバツハマン・メディックその他の研究者の尽力を経て、とくにザミートの『Kant, Herder, or the Birth of Anthropology』(2001)以来真摯な学問的検討を加えようという機運が高まっている領域である。通俗哲学は18世紀ドイツ啓蒙思想を理解する上で本来避けては通れない領域であり、また、これは当日の発表では触れなかったが、意識して読んでみるとカントの『純粹理性批判』がかなり意図的に論敵としている哲学的プロジェクトである。通俗哲学はライプニッツ・ヴォルフ・カント・ドイツ観念論……というドイツ哲学の流れに対する別の潮流があったことを示唆している。すなわちトマジウス・通俗哲学・ヘルダー・ショーペンハウアー・ニーチェ……である。もちろん、神秘主義やルター派、敬虔主義、スピノザ受容、フランス啓蒙思想受容、スコットランド啓蒙思想受容といった別のメルクマールを用いれば、この二つの潮流の絡み合い、一致点や対立点などがより正確にみえてくるであろう。

いずれにせよ通俗哲学を底の浅い思想として軽視せず真剣に扱うことによって、ドイツ哲学史の新しい姿を描き出すことができるという見通しを発表者はもっている。個人的には「ライプニッツ・ヴォルフ学派からカントへ」という理解に一定の正当性を認めつつもどこかで違和感を覚えながらこれまで研究を進めてきたが、欠けたパズルのピースを見つけ出したような気がしている。通俗哲学とカント・カント主義の関係というテーマについてさらに研究し、今後その成果を世に送り出せたらよいと考えている。本発表はその第一歩であった。

多くの聴衆から多くの興味深い質問が寄せられ、感謝しています。当日うまく答えられなかったところもありましたが、参考にさせていただきました。なお、本発表原稿を修正したものが『一橋大学社会科学古典資料センター年報』(2015年3月末頃刊行)に掲載されます。参考・引用・批判その他で使っていただければ幸いです。

前回シンポジウムまとめ

公共哲学から公共性の思想史へ —共和主義・市民社会・国家—

上野 大樹（一橋大学・日本学術振興会）

一橋大学・社会学研究科は、伝統的に「市民社会」や「市民的公共性」にかかわる社会思想史および社会哲学的研究において中心的な役割をはたしてきた。他方、欧米では 20 世紀最後の四半世紀に入っ
ていわゆるケンブリッジ学派が台頭して以降、コンテクスト主義の方法論にもとづく緻密な分析が量産
され、日本でも『マキアヴェリアン・モーメント』のエポック・メイキングな邦訳の出現に前後して、
共和主義研究をはじめとする新しい潮流からの影響が明瞭に認められるようになった。戦後日本の同時
代認識とも深く結びつきながら発展したかつての市民社会論的な諸研究で対象とされたアダム・スミス
ら「近代市民社会」の先駆的理論家たちは、こんにち初期近代という枠組みのなかで、むしろその時間
的な背後から新たな光をあてられつつある。

本シンポジウムは、一橋大学の伝統的な研究領域であるこの市民社会論の蓄積を、古典的共和主義を
核とする近年のコンテクスチュアルな思想史の角度から見返してみるということを企図して計画された。
かつての市民社会論は、どちらかという政治哲学や社会倫理学の方面で、「市民的公共性」を一つのキ
ーワードとして展開が試みられている。けれども今回のシンポでは、直接に現代へのインプリケーショ
ンを求めるような方向性、つまり公共哲学としての方向性を敢えていったん括弧にくくり、現在の研究
状況をふまえてもういちど虚心坦懐に市民社会・公共性・共和国といった理念の歴史を読みなおすこと
に主眼をおいた。タイトルにはそういった含意もある。今日の市民社会論は、「公共哲学」とならんで、
コンテクスト主義を背景とした「公共性の思想史」として探究していかなければならないというのが、
本シンポの最大のメッセージである。

このような趣旨からして最適の研究者に、今回登壇をお願いできた。パネリストの植村邦彦教授（関
西大学）は一橋大学の良知ゼミご出身で、戦後日本の社会思想史研究をその中心で吸収しつつも、近著
の『市民社会とは何か』ではケンブリッジ学派周辺の大量の研究成果をも駆使して日欧の市民社会の理
解にかんする通史を書き上げるという大業を達成された。特に今回のご講演ではスミスやファーガスン
といったスコットランド啓蒙とヘーゲルとの関係をとらえられ、現在にいたる一橋の社会思想・哲学
研究とも共振するところがあったのではないかと思う。会場とのディスカッションでは、まさにこの領
域の先達といってよい平子友長教授より示唆に富む複数の発言をいただいて討論は白熱し、また平子教
授と植村教授のあいだの議論では報告者（上野）自身たいへん啓発されるところがあり、有意義だった。

コンテクスト主義の思想史はとりわけ初期近代研究として発展をとげてきたが、ただしポーコックら
の影響もあって、その歴史的重要性は否定すべくもないとはいえ全体的な関心がやや共和主義(civic
humanism)に偏重ぎみだった点は否めない。二人目のパネリストとしてご登壇いただいた木村俊道教授
（九州大学）には、「宮廷」や「帝国（国家）」をキー概念とした近世思想史の再読をつうじて、ポーコ
ックが「マキアヴェリアン・モーメント」という枠組みのもとフィレンツェの政治思想から一足飛びに

17 世紀半ばの革命と共和国建設を説明しようとした近世イギリスの理解の枠組みを問いなおすためのご報告をお願いした。また報告者（上野）自身も、ヒューム・スミス・ファーガスンらを生みだしたスコットランド啓蒙の初期を代表する思想家ハチスンをとりあげて、初期近代という思想的コンテクストのなかでいかに古典的な政治哲学が「商業社会」としての文明社会に適合的な社会哲学へと脱皮をとげていくか、その内在的な転換の一断面を描写する報告をおこなった。両者の議論のなかで、初期近代における宮廷を有する君主政や帝國的支配の重要性をふまえて共和主義の受容や拒絶を再吟味する必要がある点が確認されたほか、18 世紀における公民的人文主義から商業的人文主義への変質という問題系のなかで、しばしば商業社会と同一視される「文明社会」についても、商業の世紀に先だつその“前史”がもつ独立した意義が評価されるべきだという見解で一致をみた。

本シンポジウムでは、初期近代という長期のスパンを設定するだけでなく、空間的にもイングランド、スコットランド、ドイツという複数の国をまたいで公共性の思想史を探索することを重視した。国民国家が本格的に成立する以前のヨーロッパの社会状況にあっては、このインターナショナルな性格の把握は思想研究にとっても本質的である。一国史的な視点にとどまっては、思想伝播のダイナミックな動向をつかむことは到底できない。しかし、ポーコックがその主著において共和主義の諸モーメントを描くに際してイタリア半島から一挙に大ブリテンに跳んでしまうという「トンネル史」を採用したことは、驚くべきことに、大陸ヨーロッパに新たな思想史研究上の空白を生みだしてしまった。このギャップは Q. スキナーらの大規模な共同研究によってかなりの程度まで埋められたが、この点については日本ではいまだ大きな課題として残されている。今回、19 世紀初頭のドイツの思想状況は植村報告で扱われたが、フランスについては報告者（上野）の準備不足もあってほとんど触れられず、またフランス革命以前のドイツの状況にかんしても講演のほうではあまりとりあげられることはなかった。しかし、討論では多地域の研究者からの発言が活発になされ、長い 18 世紀の大陸ヨーロッパの思想的布置をめぐっても、議論を通してたいへん重要な見通しが浮びあがってきたように思う。社会思想史・社会哲学分野での学的伝統に裏打ちされた一橋の奥行きを感じるとともに、それがいくつかの隣接領域と一種の化学反応を起こしてさらに厚みをましているとの印象があった。折よくシンポジウム直前の個人研究発表では、小谷英生氏による 18 世紀ドイツ「通俗哲学」についての報告があつて両者のテーマには内在的なつながりがあったように思えるし、またフランスにかんしては森村敏己教授や淵田仁氏らからルソーとの関連などについてコメントをいただいた。この論点を詰めていくためのいくつかの端緒が開けたように思われるので、今後機会が得られれば近年 B. ベルナルディ（淵田氏が精力的に翻訳・紹介を進めている）らによって精力的に論じられているフランス啓蒙と古典的共和主義という問題設定を展開していくための場も設けてみたいところである。

実際、初期近代ないしフランス革命以前における大陸ヨーロッパでの共和主義の受容と影響という問題をめぐっては、加藤泰史教授の科研費基盤研究 A の主催で 2015 年 1 月 31 日に開催された「第 2 回スピノザ・コネクション」（「第 4 回一橋哲学・社会思想セミナー」として開催）にて、報告者がその一端を検討する発表をおこなうとともに、佐藤淳二教授（北海道大学）にもルソーについて関連する発表をお願いし、本シンポでのテーマをライトモチーフとした研究プロジェクトを継続中である。そこで主題のひとつとしてとりあげたのは、マルチチュード（群衆）とコモンウェルス（共和国・公共性）の問題系である。いうまでもなくこれは、現代の政治哲学ではアントニオ・ネグリによって注目されたテーマであるが、ここでもこれらの諸理念（的現実）を思想史のコンテクストに置きなおすことで見えてく

るもの（およびそこには還元できない次元をも照らしだすこと）を重視して検討をくわえた。ただし、このトピックにかんしてはよくも悪くも注目を浴びている「ラディカルな啓蒙」という見取り図を提示している J. イズラエルの諸研究のある程度の検討が避けてはとおれないが、今回の議論ではもっぱら表面的に触れるにとどまり、今後もう少し掘り下げて論じることが必要になるかもしれない。

また、書籍化に通じるプロジェクトとしては加藤教授にも参加いただいた論文集『公共圏と親密圏の思想史』（仮題）が近く京都大学学術出版会より公刊の予定である。しかしながら、執筆・編集作業じたいはかなり以前におこなわれたということもあって、残念ながら以上のような問題意識が明確なかたちで反映されているとは必ずしもいえないかもしれない。今後はそこでの議論を土台としながら、本シンポで得られたいくつかの論点と見通しをもって、共和主義を重要だがあくまで一つの構成要素とする初期近代の複合的理解を構築しつつ、市民社会と（市民的）公共性の系譜を追跡するなかでいわゆる「近代市民社会」を歴史的に再定位するための作業を少しずつ進めていきたい。その際なかば当然ではあるが、歴史と現在の往還運動のなかであらためて「近代市民社会」の成立を考えなおす過程では、「公共性の思想史から公共哲学へ」という逆のベクトルがふたたび前景化せざるをえないのであり、その意味で現代政治哲学や社会倫理学との再接合が図られなければならないという点は忘れてはならないだろう。

各ゼミの卒論・修論・博論・新 M1/D1 の研究テーマ

《井頭ゼミ》

【2013 年度卒論】

氏名	題名
岸 俊輔	カルナップによる問いの二元論を再考する ——クワインからの批判を超えて——
鈴木 慧	J. L. マッキーのメタ倫理学説は成功しているか？——洗練された主観主義的メタ倫理学説としてのマッキー説の可能性——

【2013 年度修論】 なし

【2013 年度博論】 なし

【2014 年度 M1】

氏名	研究テーマ
市川 英梨	規範倫理学（とくに行為選択の理由について一人称的観点から考察する）
岸 俊輔	メタ哲学（とくに哲学的探求における方法論の理解と整備。その中でも、直観を理論の証拠として用いることに関する是非についての検討。）
鈴木 慧	メタ倫理学の研究をしています。道徳的言説を用いた発話・思考を行う際の主体と世界との関係について、英米分析哲学の伝統に掉さしながら、言語哲学

	的・心の哲学的・形而上学的・認識論的な検討を目指しています。特に、道徳言明の意味論についての、S. Blackburn や A. Gibbard、M.Chrisman らの表出主義的な見解に関心を寄せ、研究テーマとしています。
尹 叙軟	ウィトゲンシュタインと主体について

【2014 年度 D1】

氏名	研究テーマ
小倉 翔	アプリアリな正当化

《大河内ゼミ》

【2013 年度卒論】

氏名	題名
青野 百花	スタンリー・カヴェル『眼に映る世界』における現実 - 映画 - 自己の関係性について
太田 浩之	アダム・スミス倫理学の反哲学的な特徴 — 徳倫理学、功利主義との比較を通して —
北山 裕貴	徳倫理的観点からの仏教思想解釈と、その有用性
寺尾 宇大	ロールズの普遍的正義の理論は国際社会に適用されるのか
三次 悠太 (サブゼミ)	障害者就労支援の現状と今後の可能性

【2013 年度修論】

氏名	題名
真田 美沙	ヘーゲル『大論理学』における量の研究
森田 博之	レヴィナス『全体性と無限』における倫理的主体の定立

【2013 年度博論】

氏名	題名
志賀 信夫	貧困理論の再検討—イギリスの貧困理論の行き詰まりと社会的排除論の意義— (2014 年 7 月 9 日学位取得)

【2014 年度 M1】

氏名	研究テーマ
市川 裕之	ハーバーマス及びホネットにみる市民社会における連帯
上田 尚徳	ヘーゲル「精神現象学」の意識章の研究
魚住 知広	エーリッヒ・フロムと近代的主体性の形成
太田 浩之	アダム・スミスにおける法学の意義
小島 雅史	フッサールの生活世界と発生的現象学について
吉田 尚生	『精神現象学』へ至るイエーナ期ヘーゲルの体系構想

【2014 年度 D1】

氏名	研究テーマ
真田 美沙	ヘーゲル論理学における量論
日比野 佑香	ヘーゲル自然哲学

《加藤ゼミ》

【2013 年度卒論】 なし

【2013 年度修論】

氏名	題名
高木 駿	カントの多元主義的趣味判断とその原理

【2013 年度博論】 なし

【2014 年度 M1】

氏名	研究テーマ
鈴木 裕之	石田忠「反原爆の思想」とカントの道徳哲学

【2014 年度 D1】

氏名	研究テーマ
魏 偉	自然倫理学におけるシェリング自然哲学の射程

《平子ゼミ》

【2013 年度卒論】

氏名	題名
林 克樹	日本における成果主義的人事制度一年功制と成果主義を中心に
川越 文幾	資本主義発達史の変容に関する研究
鈴木 由真	被災地での子ども支援の意義と課題から ースクール・ソーシャルワーク実践の展望を探る

【2013 年度修論】

氏名	題名
木川 堅司	ノルベルト・エリアスの「文明化の過程」における「知識」の理論
吉山 奈々実	イヴァン・イリイチのエコロジー論
岩井 洋子	ヘーゲルの契約論
森田 博之	レヴィナス「全体性と無限」における倫理的主体の定位
真田 美沙	ヘーゲル「大論理学」における量に関する研究

【2013 年度博論】 なし

【2014 年度 M1】

氏名	研究テーマ
菊地 賢	マルクスの労働概念
野末 和夢	フランスにおける市民社会概念の転回
生田目 理恵	アーレント
太田 浩之	アダム・スミス

【2014 年度 D1】

氏名	研究テーマ
真田美沙	ヘーゲル「大論理学」量論
岩井 洋子	ヘーゲル「法の哲学」

《森村ゼミ》

【2013 年度卒論】

氏名	題名
甲斐早喜	第二帝政期における労働者の革命理念の形成過程
駒野泰玄	騎士の衰退と騎士的伝統の存続
佐藤まりえ	16~18 世紀フランスにおける民衆の世界観

【2013 年度修論】

氏名	題名
内田百合子	1873 年パリ国際オリエンタリスト会議における「日本」像

【2013 年度博論】

氏名	題名
松本礼子	18 世紀後半パリのポリスと反王権的言動

【2014 年度 M1】

氏名	研究テーマ
甲斐早喜	フランス第三共和制期の労働者意識
木口裕介	18 世紀イギリスにおける政治運動
駒野泰玄	ドイツ中世後期における騎士
高橋駿仁	フォントネルの思想

【2014 年度 D1】 なし